

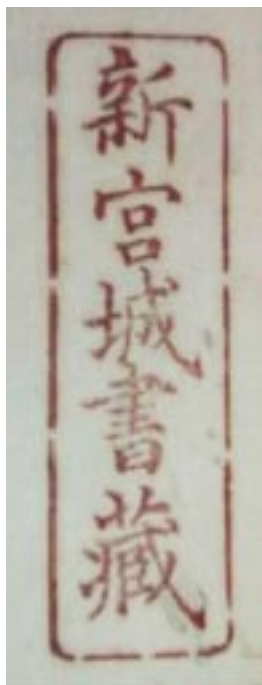
蔵書  
散策

## 第五回

紀州新宮城主水野忠央旧蔵『古事談』と  
天保改革の出版検閲「学問所改」

鎌倉時代前期に成立したとされる説話集『古事談（こじだん）』は写本の形で読み継がれ、ようやく江戸末期嘉永年間に『丹鶴叢書（たんかくそうしょ）』中の一編として刊行された。

四高蔵書中にこの『丹鶴叢書』の原本となった『古事談』（江戸期写本、6冊）がある。このことは既に伊東玉美氏が調査、報告（『日本古典文学会会報』130号 平成10年7月）されている。以下伊東氏の調査をもとに、諸書を参考にしながら述べてみたい。



四高本各冊の扉に「新宮城書蔵」という大きな朱印（8.3×2.5cm）が押されている。紀州藩付家老新宮城（別名丹鶴城）城主水野忠央（みずのただなか）（1814 - 1865）の蔵書印である。

忠央は嘉永5年（1852）10代紀州藩主徳川治宝（はるとみ）が没すると、幼少藩主慶福（よしとみ）の補佐役となり、同じ付家老の安藤直裕と謀り、治宝の側近だった伊達宗広を失脚させて紀州藩の実権を掌握した。実権を握った忠央は、産業振興や学問の奨励、軍事の刷新など、つぎつぎ新しい改革を断行した。さらに幕府の中樞に力を伸ばし、当時廃人同様といわれた13代将軍徳川家定の継嗣問題では、一橋慶喜をおす一橋派にたいして、井伊直弼と組んで南紀派の中心人物として活

躍、慶福（のち家茂）を14代将軍に擁立することに成功した。忠央は政敵からは“土蜘蛛”とあだなされて恐れられたという。しかし、桜田門外の変で井伊直弼が倒れるや、謹慎を命じられ、慶応元年（1865）新宮で卒した。52才であった。

こうした権謀術数に富んだ敏腕政治家のイメージの一方で、忠央は『丹鶴叢書』の出版事業によって近世出版史上に不朽の名を残すこととなった。『丹鶴叢書』は弘化4年（1847）から嘉永6年（1853）にかけて刊行された。当初は一千巻を目指すという壮大な計画のもとに進められたが、7帙154冊までで中絶した。中古・中世の国書の一大叢書で、その大半が当時未刊の稀覯書である。

ところで、四高本『古事談』の第1冊目を開くと扉に「学問所改」（5.4×2cm）という黒印が押されている。さらに上端に付箋が貼られており、次のように書かれている。

開版不苦候追而出来之節一部ツ、学問所江罷相  
納候其節改済候年月日認添罷差出候事  
未十一月十九日

そして、第6冊目の裏表紙裏には「水野土佐守様蔵板 / 安政七庚申年 / 五郎兵衛町 / 書物問屋 / 願人徳兵衛」と書かれた付箋が貼られている。

「学問所改」印とこれらの付箋は天保の改革によってあらたに整備された出版検閲制度（天保13年6月）



によって押印され、貼付されたものである。それまで書物問屋仲間が選んだ行事が点検し、許可を決めがたいもののみ町奉行に伺い出るといふ、問屋仲間の自主規制に依拠していた出版統制から、幕府直接の検閲、納本制度へと強化されたのである。あらゆる出版物が草稿のかたちで、著者 版元 町年寄 町奉行所 学問所、という流れを通り、幕府文教政策を所掌する幕府学問所（蘭書は天文方、医学書は医学館）で検閲を受けることとなった。（但し、『丹鶴叢書』などのような「諸家蔵版」のものは直接学問所へ提出された。）許可されたものには「学問所改」の黒印が押され、「開版不苦候」の付箋が貼られたのである。そして学問所の改めが済むと、「売弘願（うりひろめねがい）」が同じルートを通り、版元から町奉行

所へ出される。第6冊目の付箋はこれに関するものである。

当時の江戸奉行所の記録『市中取締類例集 書物錦絵之部（「大日本近世史料」）』には『丹鶴叢書』についての記録が5件ある。その内の1件に水野忠央が学問所に宛てた掛合書がある。「書肆より町奉行へ「学問所改」印の付いた元本（草稿）と刻本（印刷物）を添えて売弘願を差し出したところ、刻本ばかりか、貴重な元本も奉行所に留め置いて返さないのは不都合である」というものである。おそらくこれを受けて出されたと思える学問所より南北両町奉行へ宛てた掛合書で林大学頭は、今後元本を蔵版主へ返すようにもめている。『古事談』も忠央の手に返されたようである。

（情報サービス課図書館専門員 梶井重明）